

<p>令和 2 年 9 月 3 0 日</p>	<p style="text-align: center;">病虫害発生予報 10月号</p>	<p>茨城県病虫害防除所 茨城県植物防疫協会</p>
-----------------------------	---	--------------------------------

**イネ縞葉枯病対策のため、水稻の収穫後はすみやかに耕起し、
ひこばえ（再生稲）をすき込みましょう！**

＜ 目 次 ＞

I. 今月の予報	
【注意すべき病虫害】	
大豆：チョウ目幼虫	1
秋冬ネギ：ネギアザミウマ	1
秋冬ネギ：ネギハモグリバエ	2
アブラナ科野菜：コナガ	2
共通害虫：オオタバコガ，ハスモンヨトウ	3
共通害虫：シロイチモジヨトウ	4
【その他の病虫害】	
大豆，ナシ，ブドウ，イチゴ，促成トマト，秋冬ハクサイ，冬レタス，秋冬ネギ	5
【防除所レポート】	
令和2年の水稻における主要病虫害の発生経過と次作に向けた対応	6
II. 今月の気象予報	9

最新の農薬登録内容は、(独)農林水産消費安全技術センターホームページの「農薬登録情報提供システム」(http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm)で確認することができます。

詳しくは、病虫害防除所へお問い合わせ下さい。

茨城県病虫害防除所 Tel :0299-45-8200

予報内容は、ホームページでも詳しくご覧いただけます。

ホームページアドレス

<https://www.pref.ibaraki.jp/nour/insuisan/nosose/byobo/boujosidou2/>

フェロモントラップデータ随時更新中

<HP QR コード>



I. 今月の予報

【注意すべき病害虫】

大豆

1. チョウ目幼虫

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、オオタバコガ、ツメクサガ等のチョウ目幼虫（ハスモンヨトウを除く）の寄生虫数（25株あたり）（本年値4.1頭、平年値2.8頭）は平年よりやや多く、発生地点率（本年値69%、平年値44%）は平年よりやや高い。
- ② 9月下旬現在、ハスモンヨトウの寄生虫数（25株あたり）（本年値0.2頭、平年値1.4頭）、発生地点率（本年値15%、平年値21%）はともに平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。
- ② ハスモンヨトウでは、白変葉（若齢幼虫の集団加害によって白く透けた葉）の発生を防除の目安とする。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や莢にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤を散布する。

秋冬ネギ

1. ネギアザミウマ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い～多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、被害度※（本年値44.9、平年値34.3）、芯葉の被害株率（本年値91.6%、平年値79.4%）はともに平年よりやや高い～高い。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値、最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 雑草にも寄生するため、圃場周辺の除草を徹底する。
- ② 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ③ 複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。

(秋冬ネギ続き)

2. ネギハモグリバエ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月下旬現在、被害度*（本年値 9.3，平年値 6.4）は平年よりやや高く、発生地点率（本年値 78%，平年値 82%）は平年並である。

※被害度：食害の程度をもとに算出した数値，最小値は0で最大値は100となる。

[防除上注意すべき事項]

- ① 薬剤散布は、必要に応じて展着剤を加用して丁寧に行う。また、収穫前日数に十分注意する。
- ② 複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ 県内でネギハモグリバエの別系統が確認されている。本系統の薬剤感受性は不明であるため、防除実施後は効果を確認する。

アブラナ科野菜

1. コナガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 9月第1半旬～第5半旬のフェロモントラップへの誘殺数は、八千代町で平年より多く、笠間市で平年並である。

[防除上注意すべき事項]

- ① 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。
- ② 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ③ 結球葉菜類では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。
- ④ ジアミド系殺虫剤（IRACコード：28）の一部では、効果の低下やばらつきが見られているため、薬剤散布の際は、圃場における殺虫効果を確認しながら、安定した効果を示す薬剤を選択して使用する。

（平成26年度防除所レポート「コナガのジアミド系殺虫剤に対する殺虫効果の低下」参照）

共通害虫

1. オオタバコガ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近1か月間（8月21日～9月20日）のフェロモントラップへの誘殺数は、筑西市で平年より多く、土浦市および坂東市で平年並～やや多く、龍ヶ崎市で平年よりやや少ない。
- ② 9月下旬現在、大豆の一部圃場でやや多い発生を確認している。

[防除上注意すべき事項]

- ① 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置して成虫の侵入防止に努める。
- ② 老齢幼虫になると薬剤が効きにくくなるため、圃場をよく観察し、若齢幼虫のうちに防除を行う。なお、薬剤の防除適期はフェロモントラップへの誘殺数が増加したときであるが、作物の種類や生育ステージなどを考慮して判断する。病虫害防除所ホームページに、誘殺状況を公開しているので参考にする。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ レタスやハクサイ等では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。

2. ハスモンヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	平年並～やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近1か月間（8月21日～9月20日）のフェロモントラップへの誘殺数は、筑西市で平年より多く、龍ヶ崎市で平年並～やや多く、土浦市および鹿嶋市で平年並、銚田市で平年よりやや少ない。

[防除上注意すべき事項]

- ① 施設栽培では、ハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ② 圃場をよく観察し、集団で生息する若齢幼虫の早期発見に努める。中齢以降になると、食害量が増大するだけでなく、薬剤の効果も低くなるため、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。なお、薬剤の防除適期はフェロモントラップへの誘殺数がピークになった直後であるが、作物の種類や生育ステージなどを考慮して判断する。病虫害防除所ホームページに、誘殺状況を公開しているので参考にする。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ トマト、ピーマン、イチゴ等では収穫終期まで加害が続くので、発生しているハウスでは防除を徹底する。

(共通害虫続き)

3. シロイチモジヨトウ

[予報内容]

発生時期	発生量	発生地域
—	やや多い	県下全域

[予報の根拠]

- ① 直近1か月間(8月21日～9月20日)のフェロモントラップへの誘殺数は、つくば市(旧つくば市)で平年より多く、つくば市(旧茎崎町)で平年並である。
- ② 9月下旬現在、冬レタス、秋冬ネギ、キャベツの一部圃場で発生を認めている。

[防除上注意すべき事項]

- ① 施設栽培ではハウスの開口部に防虫ネットを設置し、成虫の侵入防止に努める。
- ② 圃場をよく観察し、集団で生息する若齢幼虫の早期発見に努める。中齢以降になると、薬剤の効果が低くなるだけでなく、作物内に食入し薬剤が届きにくくなるため、若齢幼虫のうちに防除を徹底する。
- ③ 薬剤散布は、薬液が葉裏や株元にもよくかかるよう十分な量で丁寧に行う。また、複数回散布する場合は、薬剤抵抗性の発達を抑えるため、IRACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ④ 結球葉菜類では、結球内に幼虫が食入するとその後の防除が困難になるため、結球始期前後の防除を徹底する。



ナシの黒星病の秋季防除を徹底しましょう！

黒星病はナシの重要病害です。本年は、4月下旬から発生が認められ、5月には葉、果実ともに平年より多い発生となりました(令和2年5月29日発表 病害虫発生予察注意報第1号参照)。また、6～7月は平年より降水量が多く、本病の発生が助長される気象条件で推移し、6～8月も葉での発病が平年よりやや多く認められました。翌年の伝染源を減らすため、秋季防除・落葉処理を徹底しましょう。

【防除対策】

① 落葉前の薬剤防除

収穫終了後から落葉前までに、秋季防除を徹底する。特に、徒長枝の先端に薬液が十分かかるよう、スピードスプレーヤーの散布圧を調整する。圃場の周縁部等、薬液のかかりにくい部分に対しては、手散布等により補正散布を行う。

また、農薬の使用回数は本年の収穫終了後から翌年の収穫終了までをカウントするため、注意する。

② 落葉処理

落葉は集めて土中深く埋める等、落葉処理を徹底し、翌年の伝染源を減らす。この作業ができない場合、落葉をロータリで土中にすき込むことでも効果が期待できる。

【その他の病害虫】

作物	病害虫名	発生予測	発生概況及び注意すべき事項
大豆	べと病	発生量：－	9月下旬現在，平年よりやや多い発生である。
ナシ	黒星病	発生量：－	9月下旬現在，葉における発生は平年並である。落葉前の秋季防除を徹底する。罹病葉は翌年の伝染源となるので，落葉を適切に処理する。
	ハダニ類	発生量：－	9月下旬現在，平年より多い発生である。多発している圃場では，秋季，休眠期および翌春の防除を徹底する。
ブドウ	べと病	発生量：－	9月下旬現在，平年並の発生である。罹病葉は翌年の伝染源となるので，落葉前の秋季防除を徹底する。
イチゴ	うどんこ病	発生量：－	発生が多くなると防除が困難になるため，初期防除を徹底する。
	ハダニ類		増殖が速いので，発生の少ないうちに防除を徹底する。特にビニール被覆後は，ハウス内が増殖に適した環境になるので注意する。
促成 トマト	黄化葉巻病	発生量：－	9月上旬現在，抑制トマトの一部圃場で発生がみられ，平年より多い発生である。促成トマトにおいて，タバココナジラミの侵入防止，発病株の抜き取り等，防除対策を徹底する。
秋冬 サイ	軟腐病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。台風等の強風を伴う降雨の後は防除を徹底する。
冬 レタス	菌核病	発生量：平年並	9月下旬現在，平年並の発生である。
秋冬 ネギ	軟腐病	発生量：多い	9月下旬現在，平年より多い発生である。

令和2年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応

県内の調査圃場（57圃場）等の調査結果をもとに、本年の水稲における主要病害虫の発生経過と次作に向けた対応についてまとめましたので、参考にしてください。

1. 縞葉枯病

ヒメトビウンカが媒介するウイルス病である。ヒメトビウンカの幼虫はイネ科雑草で越冬し、4月上旬頃に羽化して麦畑へ移動、増殖した後、6月上旬頃に成虫が本田に飛来する。水稲は、イネ縞葉枯ウイルス（以下、RSV）を保有したヒメトビウンカに吸汁されるとRSVに感染・発病する。水稲の感染期間は幼苗期から幼穂形成期であり、葉齢が若い時に感染した株ほど被害が大きくなる。

[本年の発生状況]

8月上旬調査では、県内広域で本病の発生を確認し、発生の中心地である県西地域の発生地点率は引き続き高い傾向であった（図1）。全県および県西地域の発病株率は、平成26年以降では最も低く、昨年までと比較して低い傾向であった（図2）。

発病が少なかった要因としては、7月上旬調査における水田でのヒメトビウンカの10回振りすくい取り虫数が平年より少なかったことから、イネ縞葉枯病の主な感染時期である7月上旬頃までのヒメトビウンカの発生量が少ない等、ウイルス感染の機会が少なかった可能性が考えられた。

本年の発病は昨年までと比較して少なかったが、県西地域の発生地点率およびヒメトビウンカのRSV保有虫率は高い状況が続いている（令和2年6月5日発表 病害虫発生予察注意報第2号参照）ので、ヒメトビウンカの発生量が多くなると、次年度以降、再び発病株率が高くなる可能性がある。そのため、引き続き、徹底した防除対策が必要である。

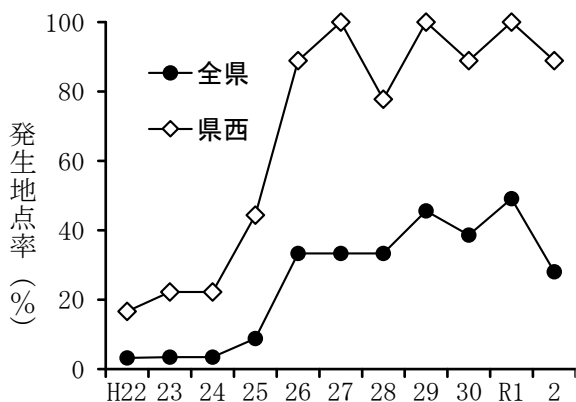


図1 全県および県西地域におけるイネ縞葉枯病の発生地点率の年次推移 (8月上旬)

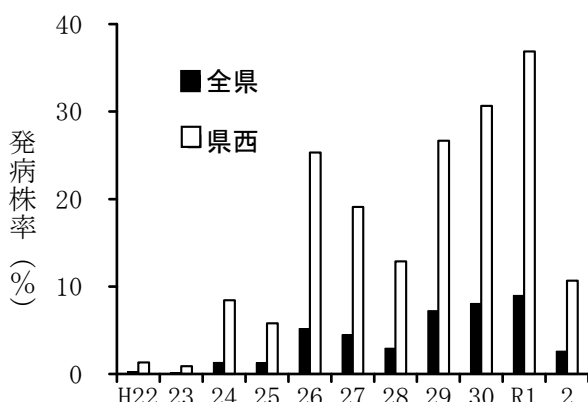


図2 全県および県西地域におけるイネ縞葉枯病の発病株率の年次推移 (8月上旬)

[次作に向けた対応]

- ① RSVを保有したヒメトビウンカが翌年の感染源となる。ひこばえ（再生稲）は、ヒメトビウンカの増殖・越冬場所となる他、ひこばえが発病株である場合、ヒメトビウンカの保有虫率上昇の原因となるため、収穫後は速やかに耕起する。
- ② 畦畔、土手等のイネ科雑草は、ヒメトビウンカの越冬場所となるため、除草に努める。
- ③ 近年発生の多い地域では、育苗箱施用剤を使用するとともに、本田防除の実施を検討する。
- ④ 縞葉枯病抵抗性品種はほとんど発病せず、保有虫率を徐々に下げる効果が期待できるため、抵抗性品種の導入を積極的に検討する。

2. いもち病

前年の籾や被害わらで越冬して伝染源となり、低温・日照不足・多湿等の気象条件で発生が助長される病害である。葉いもちは例年梅雨入り後の6月下旬から発生し始め、7月に最も発生が多くなる。その後、出穂期頃に降雨が続くと、穂いもちが多発生する。

[本年の発生経過]

葉いもち感染好適条件（BLASTAM[※]による）の出現日数は、6月は平年よりやや多く、7月は平年より多く、葉いもちの発生は平年よりやや多く推移し上位葉で発生している圃場も認められた。梅雨明けは平年より遅かったが、梅雨明け以降は日照時間が多く推移し、穂いもちの発生は、9月上旬で平年よりやや多かった。

※BLASTAM（ブラスタム）：気象条件から葉いもちの感染好適日を判定するプログラム。

[次作に向けた対応]

- ① 種子は必ず更新し、未消毒の種子を使用する場合は種子消毒を行う。
- ② 常発地では育苗箱施用剤を使用する。

3. 紋枯病

前年の被害株や畦畔等の罹病雑草に形成された菌核が越冬し、伝染源となる。菌核は代かき時に水面に浮上し、株元に漂着する。気温が上昇し、株間の湿度が高くなると、菌核から発芽した菌糸が伸長して葉鞘内に侵入し始め、楕円形病斑をつくる。

[本年の発生経過]

7月下旬に発生を確認した後、8月上旬には県内の広い範囲で発生が認められ、平年並～やや多く推移した。

[次作に向けた対応]

- ① 代かき時の浮遊物に菌核が混入しているので、畦畔沿いにたまったごみを取り除く。
- ② 常発地では育苗箱施用剤を使用する。
- ③ 窒素肥料の多用を避け、過繁茂にならないようにする。

4. 稻こうじ病

前年の病粒に含まれる厚壁胞子が、風雨や収穫等の物理的要因により土壌表面に落下し、土壌中で越冬して翌年の伝染源になる。土壌菌量が多い圃場ほど発病が多く、出穂前30日間に降雨が多い年に多発する傾向がある。

[本年の発生経過]

7月の降水量が平年より多く、平年並～やや多い発生であった。

[次作に向けた対応]

- ① 窒素肥料の多用を避ける。
- ② 前年発生の認められた圃場では特に注意し、本田防除の実施を検討する。

4. 斑点米カメムシ類（クモヘリカメムシ、イネカメムシ等）

成虫は、水稻の出穂前は畦畔や周辺のイネ科雑草地に生息する。出穂とともに水田に侵入し、穂を加害しながら葉や穂に産卵する。孵化した幼虫も同様に収穫期まで穂を加害する。

[本年の発生経過]

- ① 水田内における斑点米カメムシ類の発生は、7月上旬は平年並で、7月下旬に平年より多くなった。8月上旬、8月下旬には平年並の発生となった（図3）。
- ② 8月下旬では、県北・県央地域ではクモヘリカメムシの発生が多く、鹿行地域ではアサジカスミカメの発生が多かった。県南・県西地域ではイネカメムシの発生が多かった（図4）。
- ③ 県南地域の圃場において、本県では未発生であったミナミアオカメムシの発生を確認した（令和2年9月28日発表 病害虫発生予察特殊報第1号参照）。

[次作における対応]

- ① 水田内外のイネ科雑草の除草に努める。ただし、水田周辺の除草は水稻の出穂期近くになってから行くと、斑点米カメムシ類を水田内へ追い込むことになるので、出穂期2週間前までに終わらせる。
- ② 水田内で穂揃期に成虫を認めた場合は、直ちに成虫を対象とした防除を実施する。
- ③ 幼虫を対象とした防除適期は出穂10～15日後頃（乳熟期）である。

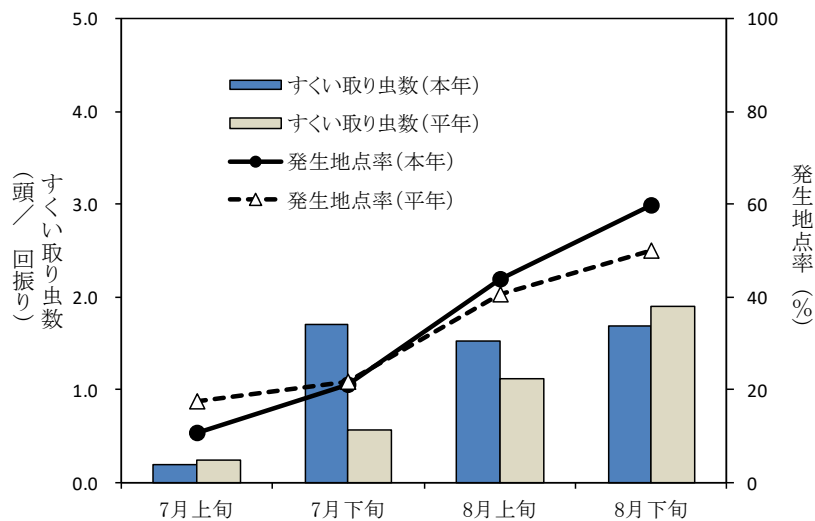


図3 水田内における斑点米カメムシ類捕獲数の推移

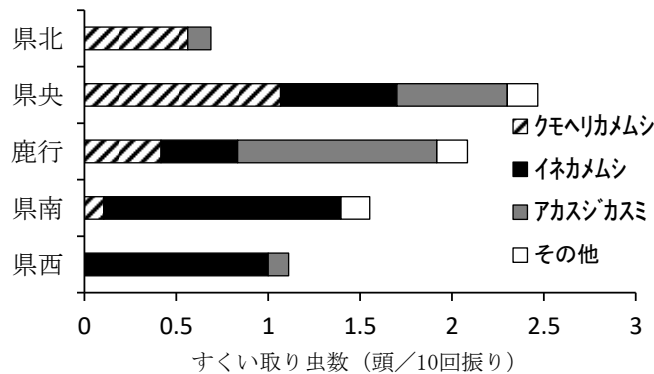


図4 水田内における斑点米カメムシ類の時期別種構成（8月下旬）

Ⅱ. 今月の気象予報

関東甲信地方1か月予報

(予報期間 9月26日から10月25日)

気象庁(9月24日発表)

<向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率(%)>

[確率]	要素	予報対象地域	低い(少ない)	平年並	高い(多い)
	気温	関東甲信全域	20	30	50
	降水量	関東甲信全域	40	40	20
	日照時間	関東甲信全域	30	30	40

[概要]

天気は数日の周期で変わるでしょう。

<1週目の予報> 9月26日(土曜日)から10月2日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

<2週目の予報> 10月3日(土曜日)から10月9日(金曜日)

気温 関東甲信地方 平年並または高い確立ともに40%

<3週目から4週目の予報> 10月10日(土曜日)から10月23日(金曜日)

気温 関東甲信地方 高い確率50%

農薬を使用する際は

- 1 使用する農薬の「ラベル」と登録変更に関する「チラシ」等を必ず確認し、適用作物、使用方法、注意事項等を守りましょう。
- 2 散布時には、周辺作物に飛散(ドリフト)しないよう注意しましょう。
- 3 農薬の使用状況を正確に記録しましょう。
- 4 薬剤抵抗性の発達を抑えるため、作用機構分類^{*}(FRACコード、IRACコード)の異なる薬剤を用いてローテーション散布しましょう。

※作用機構分類については、病害虫発生予報5月号(令和2年4月24日発表)の防除所レポート参照